

# イベントトピックス

## USJより送迎車両!

6月12日、(株)ユー・エス・ジェイ様よりご寄贈の送迎車両が納車されました。スヌーピーやセキスイストリートなどのUSJキャラクターで可愛く飾られ、子どもや保護者の方も大喜び! 連日子どもたちの送迎に町を颯爽と走行し大活躍しています。



## 災害対策訓練

5月1日の創立記念日に災害対策訓練を行いました。近隣の方々や消防署にもご協力いただき、150名以上が参加しました。避難訓練や放水に加えてAED取り扱い講習等を行い、有意義な訓練となりました。

## ふたば遠足

5月19日(火)に大阪市長居障がい者スポーツセンターに行きました。子ども達はいつもの保育室と違う、広い体育館でエアートランポリンやパラバレーンなどを楽しみ、お友達やお家族と一緒に弁当を食べ、交流を深めることができました。



## 感謝

### 大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

月	寄付者(敬称略)	物品名
4月分	大平 スズ子 4月分楽基金 19件	サッカー観戦チケット 果物 多数
5月分	匿名 梶浦 一郎 川上 徳昭	おもちゃ おもちゃ おもちゃ
6月分	5月分楽基金 36件 6月分楽基金 42件	(ホンダ)ステップワゴン Wii U 一式 西瓜 多数

月	寄付者(敬称略)	物品名
4月分	匿名 熊本県経済農業協同組合連合会	サッカー観戦チケット 果物 多数
5月分	ダイエー長吉店 (黄色いレシートキャンペーン) 斉藤 佐恵	おもちゃ おもちゃ
6月分	イオン喜連瓜破駅前店 (黄色いレシートキャンペーン) 株式会社ユー・エス・ジェイ 匿名 熊本県経済農業協同組合連合会	(ホンダ)ステップワゴン Wii U 一式 西瓜 多数

## 平成27年度永年勤続表彰

平成26年5月2日から平成27年5月1日までの間に勤続20年または勤続10年となる職員に対して梶浦理事長より表彰状・副賞が授与されました。

### 勤続20年 2名

米花 佳代子 療育部歯科衛生科科長  
森貞 史加代 あさしお診療所 主任

### 勤続10年 3名

黒川 めぐみ リハビリテーション部理学療法科 副主任  
有馬 麻衣子 リハビリテーション部理学療法科  
植野 清香 リハビリテーション部理学療法科



## 職員研修実施状況

H27年4月~H27年6月

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
平成27年4月1日(水)~3日(金) 9:00~17:30	教育研修部	平成27年度新入職員研修 (兼 平成26年度中途採用者研修)	梶浦 一郎 理事長 他	42名 随時参加あり	5階ホール
平成27年5月1日(金) 10:00~11:00	災害対策委員会	防災訓練(地震)	消防署職員	140名	5階ホール
平成27年5月21日(木) 9:00~17:00	教育研修部	大阪市重症心身障がい児者地域生活支援センター 医療的ケア研修1コース1日目	鈴木センター長・船戸園長・ 竹本部長他	48名	5階ホール
平成27年5月28日(木) 9:00~17:00	教育研修部	大阪市重症心身障がい児者地域生活支援センター 医療的ケア研修1コース2日目	塩川部長・井ノ上師長・ 高瀬薬剤科長他	45名	5階ホール
平成27年5月29日(金) 18:00~19:00	リハ部・看護部	装具の考え方と装着の仕方	リハビリテーション部 OT 田井宏治副主任	60名	PT室
平成27年6月 8・9・10・12・17・18日 9:00~14:30	教育研修部	大阪市重症心身障がい児者地域生活支援センター 医療的ケア研修臨地研修	3・4階フェニックス師長・ なでしこ 山口科長補佐	45名	3・4階フェニックス なでしこ
平成27年6月26日(金) 18:00~19:00	リハ部・看護部	ポバースコンセプトと24時間マネジメント	リハビリテーション部 OT 辻薫次長	50名	PT室



# 葦

大阪発達総合療育センター機関紙  
第18号

社会福祉法人 愛徳福祉会  
**大阪発達総合療育センター**  
Osaka Developmental Rehabilitation Center  
保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院  
特集:分園について

## 特集によせて

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長  
**梶浦 一郎**



## 分園特集によせて

大阪発達総合療育センター副センター長  
南大阪小児リハビリテーション病院院長  
**船戸 正久**



「あさしお園」「ゆうなぎ園」が大阪市からの要請により開設されてから早いもので30年以上過ぎました。当時風疹による難聴児の発生が問題となり、大阪にもその施設が是非必要とのことでした。それまでは聾学校での教育的対応が常識でした。

脳性麻痺の在宅での早期治療を基本方針としていましたので、地域に通園施設を作るのは望む所でしたが、難聴児に対する経験は全くありませんでしたので迷いました。住友病院の耳鼻科 高木先生と難聴教育をしていた三田欣二先生(故 第4代ゆうなぎ園園長)の難聴児に対する早期治療を試みましょう、という熱意に共感し分園として運営する決心をしました。しかし、その後の経営は苦難の連続でした。毎年大阪市からも補助金を受けました。最近になって運営・経営両面にわたり安定し、更なる充実に向け新しい活動も始まります。

「あさしお園」「ゆうなぎ園」は、1978年(昭和53年)肢体不自由児および難聴児の訓練施設として、大阪市の要請により聖母整肢園(現大阪発達総合療育センター)の分園として設立されました。その後2006年(平成18年)から児童に対しても障害者自立支援法が適応され、通園施設も「措置」から「契約」に変わりました。現在松山分園長の下で「あさしお園」は、児童発達支援センター(主として肢体不自由児:岩元園長)、「ゆうなぎ園」は、児童発達支援センター(主として難聴児:山村園長)として運営されています。医師・看護師以外、リハビリスタッフ(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士)、聴能訓練士、保育士・児童支援員、臨床心理士・ケースワーカー、児童発達支援管理責任者、栄養士・調理士、事務職、運転手などを配置して多職種協働で支援を行う体制を取っています。児童発達支援以外にも、地域支援の一環で保育所等訪問支援、障害児相談支援事業なども行っています。職員一同、子どもさんの健やかな笑顔とご家族の喜びがなによりも生きがいとしていますので、気楽にご相談いただき益々のご利用宜しくお願いいたします。



大阪発達総合療育センター | 発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会  
発行責任者・梶浦一郎  
URL: <http://osaka-drc.jp>

南大阪小児リハビリテーション病院(保険医療機関)  
フェニックス(医療型障がい児入所施設・療養介護事業・短期入所事業)  
主として重症心身障がい児者  
わかば(医療型障がい児入所施設)主として肢体不自由児  
ふたば(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業)主として肢体不自由児  
いぶき(特定相談支援事業・障がい児相談支援事業)  
なでしこ(生活介護事業・児童発達支援事業)

訪問看護ステーション めぐみ(指定訪問看護事業)  
TEL:06-6699-8855 FAX:06-6699-8856  
ヘルパーステーション めぐみ(指定訪問介護事業)  
TEL:06-7506-9223 FAX:06-6699-8856  
あおば(児童発達支援事業)重症心身障がい児  
TEL&FAX:06-7507-1277  
〒546-0035 東住吉区山坂5-9-16

大阪発達総合療育センター あさしお診療所(保険医療機関)  
あさしお園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として肢体不自由児  
ゆうなぎ園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として難聴児  
〒552-0004 港区夕風2-5-3  
TEL:06-6574-2521 FAX:06-6574-2524

〒546-0035 東住吉区山坂5-11-21  
TEL:06-6699-8731 FAX:06-6699-8134

## あさしお診療所の紹介



分園長 松山 元昭

あさしお診療所は、分園において診療を担っております。それぞれの部署には経験豊かなスタッフがおり、分園を支えています。分園はサイズ的に各部署が連携しやすく、質の高いリハビリテーション技術を含む療育の提供とともに、経験豊かで人情味あふれるスタッフが、障がいを持った子どもたちだけでなく保護者の方々も見守っております。

### 【あさしお診療所の外来について】

看護部 瀧本栄美子

あさしお園への第一歩は、診察から始まります。初診時年齢は2歳までの児が7~8割を占め、低出生体重児で生まれ障がいが残ったケースが多いですが、座る・立つ・歩くといった発達の遅れがみえてきた時期の紹介も増えています。

受診に至るまでの経過は様々で、疾患や療育に対する理解度や考え方・障がい受容の程度にはおおきな差がみられます。リハビリテーションや保育につなげる中で、保護者の中には、心配事や分からない事を表出しにくい方もおり、きめ細やかな医療が必要になっています。

また、センターでのプレーリー診・嚥下外来・呼吸器外来などとの連携や、わかば病棟入園調整、歯科検診、発達相談など、ひとりのお子様にも多くの職員がかかわっています。

### 【あさしお診療所のリハビリテーションについて】

リハビリテーション部 西野 紀子

あさしお診療所リハビリテーション科は、アットホームな雰囲気の中、あさしお園、ゆうなぎ園と協力し、チームで子どもたちとご家族を支援しています。

「医療を基礎として、療育支援を早期から全人的に行う」というセンターの理念実現を目指し、ボバース概念に基づく質の高いセラピーを早期から提供できるように、本園リハビリテーション部と共に技術と知識の研鑽につとめています。

「遊び」は、子どもの発達に栄養となります。その「遊び」を楽しめるように、保育の必要性を理解していただき、児童発達支援に結びつけるようにしています。また、保育所や幼稚園などの地域への移行も支援しています。

本園と分園の連携は重要です。わかば病棟での集中リハビリテーション入院、手術入院、ボトックス加療、DSB（プレーリー）加療などを適切な時期に提案し、保育所や幼稚園、就学などの準備を行い、地域で安定した生活が送れるように長期にわたって支援しています。

児童発達支援では、個別のリハビリテーションで得られた機能を、保育場面で発揮し、定着できるように取り組んでいます。保育士と協同して保護者向けの講座（年少療育講座、就学前講座）や機能別グループの企画運営をおこなったり、給食や保育場面で直接支援したりして、生活への汎化を図っています。

こうした縦軸、横軸での連続した支援により、あさしお園に通われている子どもたちとご家族が、成長を喜び笑顔で通園できるように、今後もチームで努めていきたいと思っております。

## あさしお園の紹介

あさしお園園長 岩元 康



あさしお園は昭和53年10月、大阪市の依頼を受け国及び大阪市の援助により、肢体不自由児施設「聖母整肢園」の港分園として開設されました。以来、度重なる法制度改革に対応しながらボバースコンセプトを基に医療と福祉の連携を図り、港区で肢体不自由児の療育に携ってきました。平成24年度よりゆうなぎ園とともに大阪市の指定を受け、福祉型の児童発達支援センター（主に肢体不自由児）として児童発達支援・保育所等訪問支援・障害児相談支援を行っています。

あさしお園での療育は親子通園で、乳幼児期から就学前の子どもたちへ年齢や発達にあわせた援助を行うほか、経験豊富な保育士が保護者への育児支援・相談などを通して、家庭での日常生活（家庭療育）や地域での生活（地域療育）につながるよう取り組んでいます。具体的には、0・1歳の年少児へは生活リズムの確立や親子での関わりなど育児についての支援を、2・3歳の年中児へは生活体験を広げ母子分離への準備や保育



所、幼稚園などへの地域移行にむけた支援を、4・5歳の年長児へは子どもの集団での遊びやコミュニケーション、就学にむけた支援を、それぞれ保育士・療法士・心理士・栄養士など多職種のスタッフが協力しながら実践しています。また、遠足や運動会、生活発表会などの行事やプール遊び、クッキング、人形劇、公園遊具などたくさんの体験を重ねることで、子どもに達成感を持たせ、豊かな心を育てています。

昨今、子どもの障がいや重度・重複化併せて多様化するなかでも、日々の療育を通じて少しずつ、しかし、確実に成長していく子どもたちの姿が保護者の育児に対する不安を和らげ、自信を持たせることにつながっています。子どもたちの純真な笑顔に保護者の表情も明るくなり、保護者のそそぐ愛情に子どもたちも安心して育っています。

また、地域の保育所や幼稚園等に移行した子どもや小学校に進学した子どもへは保育所等訪問支援を通して、保育士が子どもの通う園や学校を訪問し、学習や活動、ADL（日常生活動作）での困りごとや参加方法の工夫などについて施設職員と相談・助言を行い、介助方法や環境整備の改善等につなげていただいています。障がいのある子ども障がいのない子ども、ともに地域で育ち、育てられる社会の実現へ実を結べばと願っています。

あさしお園は、いつも「げんきいっぱい・たのしさいっぱい・えがおいっぱい」に、子どもたちや保護者、スタッフの明るい声に溢れています！

## ゆうなぎ園の紹介 (人工内耳を含む)

ゆうなぎ園園長 山村 貞行



ゆうなぎ園は昭和53年12月に大阪市の要請を受けて、分園の2階に設立された難聴幼児通園施設です。30年以上、大阪府で唯一の施設として行政の措置によりお預かりした難聴幼児の支援を行ってきました。平成24年度より児童発達支援センター（主に難聴児）の指定を受け、大阪府内（若干名、府外もあり）の子ども達の児童発達支援と保育所等訪問支援を行っています。

難聴は外見では聴力などの障害程度がわかりません。また、蝸牛や聴神経に障害のある感音性難聴は、投薬や手術で聴力が回復することはありません。ただ、補聴機器の進歩により、ことば獲得の臨界期といわれる5~6歳までに適切な支援を行えば、ハンデキャップはかなりの部分で補えます。さらに、難聴に対する周りの人達の理解があればより豊かに社会生活を送ることが可能になります。

ゆうなぎ園の支援内容は聴力検査、補聴機器装用の習慣化、発音・発語指導、コミュニケーション手段の獲得など児の支援に関すること、補聴機器の正しい管理方法、難聴児に接する注意点、子育てや進路についての相談、その他保護者支援に関することなど多岐にわたります。また、ゆうなぎ園の支援では手話、指文字、口話、身振りなどあらゆるコミュニケーション手段を使用しています。職員は言語聴覚士6名、保育士1名、児童指導員3名（私を含む）の10名です。この10名が事務や給食、また、あさしお園や診療所の方々の助けを得ながら日々子ども達に接しています。個性豊かな10名は通常の支援の他、園内適所でそれぞれ自身の能力を発揮しています。

ここ数年、難聴児を取り巻く状況が大きく変わってきました。まず、第一に支援開始の低年齢化です。新生児聴覚スクリーニングの導入により「早期発見、早期教育」が求められるようになりました。実際、ゆうなぎ園でも新生児聴覚スクリーニングに



より発見された0歳児（生後3か月から）の乳児の見学、入園がこの1年で急増しました。支援では難聴という障がい受容も含め、先の見通しや希望を持ち、子どもの状態やニーズに合わせた保護者支援が以前より重要になりました。また、難聴幼児支援の世界では「療育」という言葉ではなく、「発達支援」という言葉が使われるようになり、支援イコール教育という考え方が一般的になりました。

次に「人工内耳」の普及です。「人工内耳」とは簡単にいうことばや音を音波ではなく電気信号に変えて、蝸牛内で聴神経に直接伝える装置で、手術により頭蓋内に電極を挿入し、耳介を通さず電気信号を聴神経に届けるシステムです。人工内耳により以前は聴覚を活用することがほぼ不可能とされていた重度難聴児に聞こえることと、話すことをもたらしめました。ここ数年、人工内耳を装用する児が急増しています。ゆうなぎ園でもこの2、3年で装用児が急増し、現在18名、36%の児が装用しています。これに伴って、従来から行っているトータルコミュニケーション（子どもに必要なあらゆる手段や方法を使う）に加えて、最大限に聴覚活用し音声言語の習得と円滑なコミュニケーションを目指すプログラムの見直しも必要となってきています。また現在、人工内耳には年齢が1歳以上であること、平均聴力レベルが90dB以上であることなど小児耳鼻咽喉科学会で定められた適応基準がいくつかあることを付け加えておきます。

今後、ゆうなぎ園での支援では昨年度取り入れたファミリーデー、お楽しみ会、ゆうなぎ全職員による演奏会、講演会、学習会などの保護者のニーズの高い行事は継続させ、単調になりがちな日頃の通園に変化を取り入れたいと思っております。また、0歳児や人工内耳装用児に適切な支援を提供できるように研修を積み重ね職員のスキルアップをはかろうと思っております。そして、子どもと保護者に寄り添った新しい難聴幼児支援を目指したいと思います。

最後になりましたが、長年子ども達のためにご尽力された前川先生、また昨年お世話になりました山根先生の後任として、この4月より大阪市立大学医学部付属病院の小杉佑季先生に囑託医をお願いすることになりましたことをお知らせいたします。小杉先生は子ども達にとってはお姉さんのような存在で、月に1度の診察が楽しくおこなわれています。